

「神様の声は教会の外から？」

確か、今年の5月の説教で、少しだけ紹介したお話です。私の祖母の話です。私の祖母は、仏教系新興宗教である立正佼成会の割と熱心な会員でして、毎朝の仏壇前でのお勤めを欠かさない真面目な信仰を持っています。岡山県津山市にある立正佼成会の教会に所属していて、私も中学・高校の時には、色々な形でお世話になりました。たとえば、中高生を対象とした平和学習を兼ねた沖縄旅行に2回連れて行ってもらったり、立正佼成会の開祖である庭野日敬の生誕地を訪ねるキャンプツアーに高校生スタッフとして参加したり。今思えば、私は、かなり立正佼成会津山教会の未来を嘱望された若者だったんじゃないかと思います。だって、日本基督教団とか中部教区とか同信伝道会の開催する旅行・キャンプに、2度も3度も、しかもスタッフとしても参加している中高生が、ここ敦賀教会の教会学校にいたら、すごいつて思うじゃないですか。自分で言うのはおこがましいですが、結構、私は期待されていたんじゃないかと思います。そして、そんな私が、神学部に行くと思った時の、先方の落胆も、今になって想像してみると、かなり大きかったんだろうなあ、と。「なんか・・・、ごめんね」と、今になって、お世話になった恩義から来る、そんなお詫びの気持ちも若干あったり致します。

ただ、そんなお詫びの気持ちも、色褪せるような出来事が、祖母との会話の中であったんですね。キリスト教の有名な「フットプリント：足跡」という詩に関することです。ある帰省した日に、祖母が嬉しそうに、良いものを見せてあげようと言って、一枚の紙を持ってきました。そこには、当時の立正佼成会津山教会の教会長の方の写真と、その教会長が書いたという詩が載っていました。「ええ詩じゃろう」と祖母は笑っていましたが、その詩というのが、そのまま、「フットプリン

ト：足跡」だったんですね。もちろん、イエス様が、仏さんに代わっていましたが。「いやあ、こういう盗作って、本当にあるんだなあ」と、腹立つような、呆れるような、驚くような、複雑な気持ちになったことを憶えています。「おばあちゃん、いや、これ違うから」と、思わず言ってしまいました。軽い宗教衝突ですよ。 「貴重な信仰原文を巡る意見対立」と言えば良いでしょうか。

「これは、うちが昔から大事している詩なんだよ！」「いや、こっちの方が正統な継承だ！」というような。幸いにして、私と祖母の間で、数百年続くかもしれない宗教紛争は生じませんでした。案外、既存の世界規模の宗教対立も、その初めはこんな感じなんだろうか、とも思いました。

けれど、それから、しばらく経って考えてみますと、イエス様が仏さんにすり替わるという致命的な変更が加わっていながらも、「フットプリント：足跡」という詩が最も伝えたいであろう、「あなたが人生において一番大変な時に、あなたの信頼する方は、あなたを背負って歩いてくださっているんですよ」という主要メッセージは、損なわれていないんですよ。このメッセージの受け取り手の気持ちになって考えてみますと、その「信頼できる方」が、イエス様であれ、仏さんであれ、得られる安心感、充足感、幸福感は変わらないわけです。私は、この「フットプリント：足跡」が、キリスト教の詩であることを知っていますし、これが仏の教えに転化されていることに不満と違和感を持っています。でも、見方を変えるなら、「なるほど、神様は、仏教の力も借りて、多くの人たちの平安のために工夫されているんだな」と捉えることも可能と言えば、可能です。感情的に納得できない部分は、まあ、確かにありはしますが、客観的な結果だけを見るなら、「その人の心の平安」というゴールは変わりません。私たちは、自らの信仰心のゆえに不満を憶え、正しい信仰理解を宣べ伝えたいと思うかも知れません。けれど、もしかしたら、熱情と言われる神様でさえ、私たちの救いと平安のために涙を飲んで、あらゆる手段を講じているのかも知れない。自らを犠牲にしてまで、この世を愛し抜かれたイエス様は、ご自分の知名度や名声よりも、人々の安らぎを優先

されたのかも知れない。そんな風に考えてみても良いのかな、と私は思います。

本来の場所や、本来の所属とは異なるところから、主の御声が響き、また、広まっていくという前例はゼロではありません。パウロさんが、使徒言行録においてギリシャ神話の町アテネに置いてあった「名もなき神」の祭壇を用いて、「主の御名」を広めようとしたように、異教の祭壇が御言葉の依り代になることもありました。また、最初のクリスマスの夜に、外国の、しかも星占いの学者たちが招かれて、御子誕生の証人として用いられたように、信仰者ではない者が福音の受取人、伝達者になることもありました。そして、今回の聖書箇所を通り、異国ペルシアの王様であったキュロスによって、主の神殿再建と、「主が共にいてくださる」というインマヌエルが宣言されたように、異国の権力者によって力強く御言葉が語られることもありました。神様の御計画と御心と御声は、必ずしも神殿内部から、教会内部から響き渡るとは限らないことを、改めて思い知らされます。しかし、それは決して神殿の無力さ、教会の無意味さを突き付けるものではなくて、「この神様の造られた世界にあって、主の御言葉が、至るところから響き渡るのは、そんなの当たり前のことだ」ということです。そして、そのことを知って、私たちの日常と人生が、常に主の御言葉に彩られ、常に支えられていることに感謝することへも繋がっていきます。神様の支配力は、イエス様の愛と恵みは、私たちの思いと信仰を大きく上回って、この世界を包み込み、御心のままに実行され、満ち満ちていることを知ってほしいと思います。

さて、今回取り上げましたエズラ記という書物ですが、これはユダヤ教において「諸書」という「諸々の書物」という分類に分けられていまして、キリスト教では「歴史書」として理解されています。このエズラ記は、旧約聖書の説教で、私がよく取り上げる、イザヤ書などの預言者の書や、創世記などの律法の書とは、ちょっと趣が異なります。何と言いますか、これは歴史書ですから、神様の具体的な御言葉や、具体的な御業に焦点を当てた書物、ではないんですね。これは、当時の

イスラエルの民が経験した出来事の記録ということです。もっとも、正確な客観性のある歴史的事実が書かれている、とは言えないのですが、少なくとも、このエズラ記は、「神様の導かれる歴史の中で、何が起こり、人々はどうしたか」ということを伝えようとしています。直接的に「神様は、こう言われた」とか、「神様は、こう為された」とか、あるいは、「神様の言いつけで、これはしてはダメ」とか、「神様が言うから、これをしないといけない」とか、そういう直接的、教育的、規律的なことは、あまり書かれていません。あくまで、「こんなことが昔あってな」という歴史の書物です。だから、このエズラ記から、主の御言葉を聴こうとするなら、その歴史の出来事を読み解かないといけません。預言者を通して神様が「こうしなさい」と言われているわけではないですし、律法によって「こうしなさい」と言っているわけでもありません。

「歴史を読み解かないといけない」というひと手間は、神様の福音を早く聴きたい我々にとって、ちょっと面倒に思えるものです。現実として、私も、敦賀教会に来て初めて今日、エズラ記で説教をしています。今まで、選んで来なかったということです。一方で、歴史という、今を生きる私たちに繋がる、実際の出来事の中に、神様の素晴らしい福音が込められているとしたら、それって、嬉しいですよ。特別に「愛」とか「恵み」とか「赦し」とか「平安」とか言葉に出して言われてなくても、「歴史が神様の愛と優しさを示している」とすれば、その説得力は非常に大きいと言えます。

旧約聖書に記されている「歴史」において、最も私たちが触れることが多いのは、おそらく「バビロン捕囚」だと思います。紀元前 597 年～578 年、約 20 年の歳月をかけて行われた強制移住政策です。当時、新バビロニア帝国の王ネブカドネザル 2 世が、聖都エルサレムを侵略し、これを破壊しました。その際に、エルサレムの住民を全員虐殺するのではなく、生き残った人々を、自らの領地に連れ帰り、そこに定住させました。この侵略、破壊、拘束、連行、定住という一連の出来事

を、「バビロン捕囚」と言って、旧約聖書の中では、何度も折に触れて、語られています。そして、その語り口は、だいたい、反省と懺悔を伴っています。「昔、あの時、ちゃんと神様の御言葉を守ってれば、こんな悲劇にはならなかったはずだ」という反省と懺悔です。預言者のいくつかの書も、捕囚前の警告と、捕囚期の叱責と、捕囚後の悔い改めを、様々な言葉を用いて語り残しています。私も、今までの説教を通して、バビロン捕囚という経験に基づく、御言葉の取り次ぎをしたことがあります。ただ、今まで、あまり触れていなかったのは、「バビロン捕囚」が、終わった時、いったい何があったのか、という詳しい出来事についてです。今日の聖書箇所は、その今まであまり詳しく触れていなかった、バビロン捕囚の終わりに関する部分になります。

紀元前 538 年、バビロン捕囚が完了してから、約 40 年が過ぎた頃、バビロン捕囚を行った新バビロニア帝国は、アケメネス朝ペルシャという国によって滅ぼされました。イスラエルを打ち負かした敵の国を、他所から来た他の国が倒してくれたのです。この颯爽とヒーローのように現れたアケメネス朝ペルシャという国の王様が、キュロス 2 世という人でした。今日の聖書箇所に登場するキュロス王のことです。当時、ペルシャという国は、破竹の勢いで勢力を拡大する巨大帝国で、新バビロニア以外の国々も制圧・征服し、史上空前の版図を築くに至りました。少し信仰から離れて、史実的な側面から見れば、キュロス王にとって、新バビロニアの征服は、数ある功績の一つに過ぎず、征服に伴う、イスラエルの民の解放についても、それは征服した住民に束縛を強いるよりも、寛容・融和を示した方が、統治する上で有効だったという政治的判断に基づいていました。

けれど、イスラエルの民は、そのアケメネス朝ペルシャの政策と、キュロス王による政治の裏側に、神様の御心を見るという信仰を得たのです。「主は、かつてエレミヤの口によって約束されたことを成就するためにペルシアの王キュロスの心を動かされた」と。歴史というものは、読み解き方によって、聖書のように多彩な解釈が可能になります。それが歴史の面白いところで、時代劇や

大河ドラマが人気を博している理由でもあります。イスラエルの民は、エレミヤによる預言の成就を、バビロン捕囚の終結の中に見つけたのです。そして、神様は、異邦の巨大帝国の王様に、こう言わせるんですね。「ペルシアの王キュロスはこう言う。天にいます神、主は、地上のすべての国をわたしに賜った」と。「イスラエルの王」が言うんじゃないんです。このあたりのイスラエルの民の信仰理解が、深いですよ。神様の御言葉は、イスラエルの王が言おうが、ペルシアの王が言おうが、どちらも等しく尊いんだと。どちらも、等しく神様の支配下にある地上の王なのだから、誰が言っても一緒という、そんな理解があるのかも知れません。

主の御言葉が「誰を通して言われているのか」ということは、実は、あまり重要ではありません。誰を通して言われたとしても、主の御言葉は、主の御言葉です。だから、私たちも、「あの人から御言葉を聴くはずはない」と判断することはできません。信仰の有無に関わらず、立場の上下に関わらず、年齢の大小に関わらず、誰でも神様は心を動かして、私たちに対して、大切なことを語られることがお出来になります。そして、教会の外側の、教会とは無関係に思えるところから「神が共にいてくださる」という福音が届けられる、そんなこともあるのです。だから、私たちは、この目と耳を、教会だけに集中させていては、もしかしたら、神様の尊い御声と御業に気付かない可能性があります。私たちは、私たちの信仰を養うためにも、この世界に興味を持って、ニュースを見たり、音楽を聴いたり、本を読んだり、講演を聞いたり、芸術に触れたり、そうやって「知るところを深める」のは、大切なんだろうな、と思います。

何処で何を見聞きしようが、何を知らされようが、「この世はみな神の世界」です。当然、時には耳に心地悪く、目に不愉快な現実も多々あるかと思いますが、最近話題のことで言えば、ジャニーズ事務所の一件は、日本メディアと、そのメディアを視聴し、消費する我々の態度も含めて、非常に後味の悪い状況が続いています。ロシアとウクライナの戦争についても、福島処理水を巡る理

解の相違や風評被害の懸念についても、立場や主張は違えど、関心を持って考え続ける姿勢が求められています。教会の外から響いてくる福音に感謝を憶えることができるなら、「私にとって、不愉快なニュースは、もしかしたら、神様からのメッセージなのかも知れない」と受け止める、そんな感受性もあって良いと思います。

今日から始まる1週間、それぞれの場所で、それぞれ違う御声を聴く場面もあろうかと思えます。その御声が聴こえてくることは、つまり、神様が、私たち一人ひとりに御心をもって関り、何かを期待されている証でもあります。その御声に応じて歩む先に、私たちが為すべき平和の業が備えられているのかも知れません。

お祈りを致します。

神さま。今日も私たちをこの礼拝堂に招いて下さり、また、尊い安息日に与らせて下さり、感謝致します。私たちは、あなたの御言葉と福音とに思い焦がれて、聖書を開き、御言葉の取り次ぎに耳を傾ける日々を過ごしています。しかし、あなたの御声は、この大空を駆け巡り、あなたの御言葉は、社会の中に響き渡っています。どうか神様、あなたを慕い、あなたの御業のために奉仕を為さんとする私たち一人ひとりに、あなたの御声を聴き分ける術と、あなたの御言葉を受け止めて行動できる力とをお与えください。そして、何よりも、日々の何気ない日常に備えられた、あなたの福音に気づき、感謝することのできる心を持つことができますように、導いてください。私たちが、あなたの平和の使者として、耳を傾け、祈り、奉仕し、感謝することができますように。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。